Myanmar-Japan Collaboration Project for Fostering Medical Human Resources

ミンガラバー こんにちは

認定 NPO法人
日本・ミャンマー
医療人育成支援協会
〒700-0815
岡山市北区野田屋町2-4-18
TEL：086-224-0102
FAX：086-221-2554
URL：http://www.mjcp.or.jp

故田中理事から5千万円

奨学金、記念ホール…

協会　使途の具体化急ぐ

2020年2月に80歳で亡くなった協会理事の田中茂人さん（元岡山市医師会長）の妻美知子さんが12月、「故人の遺志です。活動に役立ててください」と5千万円を協会に寄付した。協会は多額の寄付のため特別会計の「田中基金」として運用することにし、使途の具体的な検討をしている。

2018年1月のミャンマー旅行の時、菩提樹の下の田中茂人さん

田中さんは岡山大学医学部卒。岡山市医師会理事、副会長を経て1998年から2002年まで会長、また06年から18年まで岡山県医師会理事を務めた。

長年にわたる開業医としての地域医療貢献と医師会活動の功績から、日本医師会の最高優功賞、厚労大臣の公衆衛生功労賞を受け、19年秋の叙勲で旭日双光章を受章した。

協会では06年の発足当初から理事を務めていた。

故田中理事からの寄付5千万円の使途を検討するため、協会は12月、メールによる理事懇談会を開いた。岡田茂理事長が①ミャンマーの医科大、歯科大、看護大、薬科大、医療技術大などの医療系学生を支援する奨学金にあてる②ヤンゴンのMAJA（ミャンマー元日本留学生協会）が計画中の会議室、日本図書館などが入る建物のフロアの1つを「田中記念ホール」として寄贈する③残額については協会活動の充実に使う、の3点を提案、了承された。

奨学金と記念ホールの具体化については、協会の活動に理解のあるミャンマー側のペキン元保健大臣、ミョウキン元国立医学研究所長やタンセイン国民健康財団理事長らの協力を得ながら作業を進める。岡田理事長は「今、ミャンマーはコロナ感染が深刻で渡航できない状態。インターネットで情報を交換し、できるだけ早く田中さんの遺志を実現したい」といっている。

協調システム見習いたい

倉敷中央病院で研修

ミャンマー陸軍病院 ニィニィトン医師

協会の支援などによって日本で学ぶミャンマーの医療関係者では初めて、軍医が2020年1月から4月まで倉敷中央病院で研修。その研修記です。

私は2001年に防衛医学校を卒業し、05年に病理学修士、16年に医学博士の学位を取得しました。病理学の経験は15年です。

私はずっと日本で勉強することを願っていました。日本は世界一の医療システムをもつ先進国だからです。協会の岡田茂理事長、倉敷中央病院病理部の能登原憲司部長、ミャンマー軍医療サービス部長のティンモウミャ教授の支援により念願が叶いました。

研修では特に消化器、乳腺、女性生殖器の病理について学びました。これらの臓器のがんはミャンマーでは非常に多く、死亡率も高いからです。他にも前立腺、肺、肝臓、膵臓や腎臓のがんにも触れました。

毎朝、臓器の切り出しを行い、その後、病理スライドを見ます。部局間の会議は午前と午後の2回、毎日行われ、私も出席。内容は全く理解できませんでしたが、そのうちにどのタイミングで質問すればよいのか分かるようになりました。他の部局との会議では腎臓科、放射線科、外科との会議が印象的に残っています。

私は部局間と部局内における良い協調のシステムを見ました。これはミャンマーで見習いたいものだと思います。非常に印象的だったのはすべてのスタッフは非常に高度の知識を持っており、時間を重視することでした。

私が日本での研修で得たことをまとめると、（1）国際標準に沿った設備を有する検査室が理解できた（2）人材の活用の仕方が見えた（3）優れた保健医療を提供するための人材と設備の良き共同作業（4）肉眼的、顕微鏡的病理組織の解釈の自信が向上した（5）研修の経験を同僚と分かち合う、の5点です。

3度にわたり岡山大学などで学び、博士号を取得したタテサン医師。ミャンマーでコロナ感染が急に拡大するなか、コロナ対策医療センターの臨床検査室でボランティアとして働いた。その体験記を寄せてもらった。

コロナと闘う

ヤンゴン第二医科大学
タテサン准教授（病理学）

死に至る怖さ実感

ボランティア病理医として私の活動は2020年10月初めに開始、12月4日に終わりました。検査室はコロナ対策医療センターの一つの部門です。センターは保健・スポーツ省の監督の下で各部門に必要な専門家を確保。検査室は仮設の大型テントの中にあり、ヤンゴン北のサッカー場を含むスタジアムに作られました。

私たちは比較的軽い患者から重症患者までのあらゆる検査検体を受け取り、必要な臨床検査をしました。例えば肝機能検査、腎機能検査、出血素因や糖尿病、血栓症に対する検査などです。輸血に必要な検査もあり、これは回復期の患者の血清を重症患者に輸血するためです。感染のスクリーニングなど全部で30のテストがあります。病理医、細菌医、医療技師などが一緒に働きました。

仮設テントの臨床検査室の前でスタッフと一緒に。左から3人目がタテサン医師

血液検体の検査は最初の頃は一日に30検体ぐらいでしたが、11月の終わりには80検体に増えてきました。11月中には回復期の血清投与は42回にも及びました。検体ごとの検査の数も違い、数種類の検査で終わるものもあれば20以上の検査が必要なものもありました。

仕事はきつかったです。病室に出かけての採血はあらゆる段階で完全防護服を身に着けなければなりません。また検体の到着が遅れたり、間違った試験管に入っていたり、血液量が必要な検査には足りなかったり。それだけに注意深く作業し、疑いがあれば臨床医に連絡をして完全な情報を得たり、患者の状態によりどのような検査が必要なのか確かめたりします。仕事は朝9時から始まりますが、夜の10時に終わることはほとんどありませんでした。

毎日、救急車が検査室の側を通り過ぎます。重症の患者が救急室に運び込まれるのです。今日到着した検体が次の日にはもう到着しないというような経験が毎日のようにありました。回復期の血清は重症患者に2日続けて投与されますが、次の日にはもう必要がない悲しい患者も沢山いました。その度に、検査室のスタッフは生き死に関わる検査を手掛けている重要な仕事をしていることに気付かされました。そして、コロナは死に至る怖い病気であることを実感しました。

ミャンマーに移住して

元三重大学教授（脊椎外科）
笠井裕一・協会理事

学校や僧院がコロナ患者の隔離施設に

ミャンマーに2019年6月に移住して、1年半が経ちました。この間のミャンマーでの生活や出来事などについて報告します。

娘はトリリンガル

家族3人暮らしです。娘の裕心（ひろみ）は2歳になり、日本語、英語、ミャンマー語のトリリンガルを目指していますが、毎日いたずらばかりしていて、妻のタンダは忙しい毎日を送っています。私はコロナでステイホームしている間に、約10キロのダイエットに成功しました。

住居はヤンゴン市内のサンチャウン区にある11階建てのコンドミニアム。プールやジム、子供の遊び場もあり、窓からはシュエダゴンパゴダを眺めることができます。1カ月の家賃は12万円ほど（電気代別、インターネット代別）。ミャンマーではエレベーターがあればコンドミニアム、なければアパートと定義されています。

家族3人元気です

日本で発行してもらった国際免許証を持って、ヤンゴンの自動車免許センターへ行き、25万チャット（約2万円）を払うと、ペーパーテストなし、実地試験なしで、ミャンマーの自動車免許を取得できました。さっそくミャンマーで組立てられているスズキの新車を約200万円で購入しました。

すぐに自動車保険（日本の保険会社傘下のミャンマー国内保険）に入りました。対人の死亡時保険金の欄には100万チャット（約8万円）と書かれていました。ミャンマーにおける人の命の価値は、日本の千分の1程度だと推測されます。

タイでも教える

私はヤンゴン市内のクリニックで整形外科診療をしています。ミャンマーで医師として働くためは、日本の医師免許証のほかに、専門医である証明書、厚労省からの医師法に違反していない医師である証明書が要ります。ミャンマーでの医師登録料として毎月500ドルの支払いが必要です。さらに、ミャンマー人医師とペアにならないと医療行為ができないので、その相手を登録しなくてはなりません。私の場合は、ヤンゴン第一医科大学整形外科准教授になってもらっています。また私は同医科大の栄誉教授も務めており、時々、大学を訪問しています。

このほか1年間のうち4カ月間、タイのコンケン大学整形外科の教授として働いています。ここでは遺体を用いたバイオメカニクス研究や論文執筆指導をしています。

夕焼けに染まって

1995年から世界遺産登録をずっと目指していたバガン遺跡がやっと2019年に登録されました。ミャンマーでは、ピュー（紀元前2世紀～紀元9世紀ごろまでエーヤワディ川沿いの平原に存在した王国の遺跡）が一足早く登録されており、これで2つ目の世界遺産。ピューには一度行きましたが、あまり知られていないためか、ほとんど観光客がいませんでした。

ヤンゴンの街を染める夕焼け

ミャンマーでは毎年3、4月に綺麗な夕焼けが見られます。これは、ずっと雨が降らない乾季にたくさんの塵や埃が空中に溜まり、レーリー散乱という現象が生じるためです。すなわち、太陽の光の中で青色の光（散乱し易い）が地球に届かず、赤色の光（散乱しにくい）だけが届くので、夕日がピンクやオレンジに見えるのです。

5月中旬から始まる雨季は10月上旬まで続きます。一日中大雨が降ることもあり、道路はすぐに冠水。傘を持たずに外出すると、ずぶ濡れになってしまいます。

ロックダウン

コロナ感染の拡大でヤンゴンでは20年4月から6月、そして9月からロックダウンしていて基本的にヤンゴン市から外に出られませんでした。シュエダゴンパゴダなどの主な観光地はずっと閉まっており、小中高校、大学などの教育施設も閉鎖され、さらにデパートの店舗やスーパーマーケットも閉まり、レストランはテイクアウトのみの営業が続きました。

8月末まではコロナ感染病院は、それまで結核やエイズの患者を受け入れていたワイバージィ感染症専門病院、婦人科や小児科専門病院だった南オカラッパ病院に加えて、ヤンゴンから2時間くらい北方に車で行ったところに新設されたファウンジィ　病院の3ヵ所だけで十分な対応ができていました。しかし、9月からの急速な感染拡大に伴い、ずっと休校が続いている小中学校、僧院、サッカー場などのスポーツ施設なども軽症者用の隔離施設として使用されています。

患者がほぼゼロになったヤンゴン整形外科病院

私がよく訪問するヤンゴン整形外科病院では、ロックダウンの影響で大けがをする人が極端に減り、患者数がほぼゼロ。この病院の医師や看護師たちは、1週間ずっと病院に住み込んで働き、その後の3週間は自宅待機するという、怪奇なローテーションで仕事をしています。

現在、群馬県の石井病院が母体となって私も関わり、日本のJICA（国際協力機構）のサポートを受けてヤンゴンに日本式の病院を建てる予定ですが、コロナの影響などを受けて、非常に難航しています。21年の完成予定が、今は23年の完成を目指して、牛歩の歩みです。近年、ヤンゴンには「国際病院」と名のつく私立病院がいくつも建てられていますが、いずれも病院評価の国際基準を満たしていません。そこで、石井病院はJCI（医療の質と患者の安全性を国際的に審査する機関）の認定に合格できる病院を目指しています。

私は今、ヤンゴン市内東部の地価3.3平方メートル当たり1坪70万円程度のところに一軒家を建築中で、21年5月に完成予定です。

◇

コロナ感染によって世界のグローバル化にストップがかかり、ミャンマーでも先進国からの様々な支援が減少して、国内の経済成長が明らかに停滞しています。こんな時こそ、日本とミャンマーとの架け橋となる支援をよろしくお願いします。

駐日新大使にソーハン次官

東京でレセプション

新しい駐日ミャンマー大使にソーハン外務次官が就任、20年12月2日、東京のホテルで歓迎レセプションが催された。日本ミャンマー協会（渡邉秀央会長）の主催で、岡田茂理事長が招待されて出席した。

新大使は日本に留学、大使館の一等書記官を務めた経験がある日本通。

岡田理事長講演

ライオンズ例会で

20年12月6日、金光ライオンズクラブ（岡山県浅口市、松浦孝雄会長）の60周年記念例会で、岡田理事長が講演。「岡山発祥のミャンマー医療人育成事業」と題して協会の活動について話した。

協会に同クラブは40万円を寄付した。

編集後記

協会へ5千万円寄付の故田中茂人理事は内科医として、妻の美知子さんは小児科医として、ともに多忙な日々のなか、外国からの大勢の留学、研修生や交換学生の世話をしました。田中家に入れ替わり立ち代わり寄宿した数は19カ国の38人。最初は40年も前で、当時はまだそんなに国際交流が盛んでなかったころです。故人は草の根の国際人でもあったのです▼コロナ奮闘記のタテサン医師。懐かしい名前です。留学や研修で岡山にやってきたミャンマーの学生や医療関係者の中で、最も長く滞在したのが彼でした。協会事務所にもよく顔を出し、人懐っこくて礼儀正しく、岡山大学ミャンマー留学生の会の会長として仲間の面倒見がよい好青年でした。（西﨑）